

生命（いのち）の選択、生き方の選択

——先端医療と生老病死——

早 島 理

皆さん方、こんにちは。ご紹介いただきました早島です。

私の専門の一つにはインド仏教学、特に瑜伽行唯識学派の研究です。この学派は心の働きを中心に人間の存在について、あるいはいのちのあり方を考えてきました。もう一つは生命倫理あるいは医の倫理で、これは生命いのちについての現代的ルールと理解して下さい。（なお、医学医療あるいは生命倫理の視点からは「生命いのち」、それ以外は「いのち」と書き分けることにします。）

前任の長崎大学と現職の滋賀医科大学とで併せて二十数年生命倫理委員会、あるいは医の倫理委員会の委員を仰せつかり、生命倫理の研究にも携わるようになりまし

た。特に現在の滋賀医科大学では医学部の内側から生命倫理が抱える問題を考える立場になり、医学医療の研究者や、お医者さんや看護師さんたちが医療の現場で抱えている様々な問題を改めて問い直す機会を与えられたこととなります。あるいは先端医療がもたらした素晴らしい成果は同時に生命に関する新たな問題を次々に引き起こします。そのような問題に対して私どもは仏教の立場から「いのち」をどのように考えることができるのか。中には困ったことに、これが正解だというのがない問題があります。こういう問題を考える時に、少なくともどうという視点が必要なのかということを取り上げて、一緒に考えさせてもらいたいと思います。時々、具体的なデータを出します。あまり驚かないでください。

仏教思想からみる「いのち」と、医学医療、あるいは先端医療からみる「生命」というのは、どこが共通でどこが違うんだろう。同じ「いのち」でありながら、考え方がどう違うんだろうか、その違いを一つの手掛かりに少し考えてみたいと思います。今日は三つの視点を申し上げます。一つは、我々は同じように、お医者さんも、皆さ

生命(いのち)の選択、生き方の選択

ん方も、あるいはお坊さん方も、「いのち」という言葉を使いますけれども、どこが共通でどこが違うんだろうか、それを確認させてもらいます。次に医学医療というのは当然のことですけれども、生きている人だけを相手にします。死んだ人の診療は致しません。でも我々は生きて死んでいきます。私たちは「いのち」があるのが「生」で「いのち」がなくなるのが「死」であると、何気なく考えています。しかし、そうではなく「生」と「死」の両方から「いのち」を見る。あるいはお釈迦様が言われたように、「生」も「死」も含めて「いのち」である。その意味を考えてみたいと思います。皆さん方に今日お配りしている資料の中に、小学生の詩があります。その詩を手掛かりに考えてみようと思います。最後の視点は同じ「いのち」ですけれども、これまで使い分けてきましたが、「生命」と「いのち」、区別して使います。漢字のほうの「生命」、これは医学医療、サイエンスの方で使う「生命」です。他方、仏教的な意味合いを含めて広い意味で使うときは「いのち」と表現します。先端医療が示してくれる「生命」の選択と、我々が「生命」の選択を受けた後で、どういう「生き方」がありうるのかということ、いくつかの例を取り上げながら一緒に考えてみた

いと思います。

先ず「いのち」の意味を考えてみましょう。これは実際にあつた話です。皆さん方も、御身内の方を亡くされた方いると思うんですが、おばあちゃんが亡くなった。お通夜の前の会話だそうです。小学校一年生、女の子だそうです。おばあちゃん大好きだったんでしょうね。おばあちゃんが病院に入り、一生懸命看病したけれど亡くなっちゃったんです。病院に入るといことは治って元気になって退院してくれるはずだと思つていたのに、おばあちゃん亡くなっちゃったんです。この子はどうも腑に落ちないんです。ほつといて亡くなつたんなら別でしょうが、ちゃんと病院に入つて治療も受けたのに。それでお父さんに聞くんですね。「お父さん、病院つて病気を治すところでしょう。」「そうだよ。」「それなのにどうしておばあちゃん死んじゃつたの。誰が悪かつたの？」おばあちゃんが不摂生でお医者さんの言うことを聞かなかつたから？ あるいは、私たちがもっと看病すれば良かった？ もっと早く気づいて病院に連れていけば良かった？ 私たちが悪かつたの？ 家族が悪かつたの？ それとも病

生命(いのち)の選択、生き方の選択

院? もっと良い病院に変わったら良かったの?」最後の問いかけはこれは医学部に
 いる者にとってキツイんですね。この後にもう一つキツイ質問があるんです。この女
 の子が続けて言うんです。たぶん、おばあちゃん病院に入って、入院費その他お金が
 かかりますよね。お父さんやお母さんが親戚の方などに「これだけお金かかって大変
 だ」という話を電話でしてたんでしょね。この小学生の子がお父さんにこうやって
 聞くんです。「おばあちゃん病気が治らなかつたのに、どうしてお金払うの」。キツイ質
 問ですね。医学部にとってはキツイ質問なんです。子どものおもちゃの病院つてあり
 ますよね。壊れたお人形その他持つていくと、見て、治るもんなら治す。で、修理代
 いくら。治らないもんは、治りません、と。だからこの女の子の感覚からすると、治
 ってお金払うのは分かるけど、病院に入って治らなかつたのにどうしてお金払うのつ
 て尋ねたのでしょうか。ちよつと皆さんにも考えてもらいましょうか。

誰が悪くておばあちゃん死んじゃつたの。どうして。お父さん答えられない。例え
 ばお医者さんだったら、「それは悪性の癌だったから」とか、「交通事故で担ぎ込まれ
 た時は手遅れだったからね」って、たぶんそう説明すると思います。これはこれで正

しいんです。せっかく皆さん方、仏教系の大学で仏教を学んでおられますから、お尋ねしましょう。「どうしておばあちゃん死んじゃったの」という質問にお釈迦様だったら何と答えると思いますか。お釈迦様に会ってみないと分からないと言われたら困りますが、お釈迦様の教えからすると答えは決まってるんです。「それは生まれたからだよ」。この答えも正しいんです。まったく別な答えですね。交通事故だから、悪性の癌で手遅れだったから、これも正しい。「生まれたからだよ」、これも正しい。何が違うんだろう。それは「いのち」を考える視点が違うからです。どちらが良いとか悪いとかじゃなくて、悪性の癌だったから、交通事故でもう快復しなかったからというの、生命がどういいう構造になっていて、どういう働きをしていて、どの部分が機能しなくなったから、おばあちゃんは亡くなったんだよ、とそういう説明。お釈迦様の答え、「それは生まれてきたからだよ」というのは、生まれてきたら必ず死ぬんです。いくら先端医療が進んでも。大事なことは、死ぬことが分かっている、それでも生まれてきて、生きていくことの意味はなんだろうと。その視点からの答えが「それは生まれてきたからだよ」。お釈迦様は「生老病死、みんないのちだよ」と

生命(いのち)の選択、生き方の選択

言います。その中には、生まれて、年老いて、時には病気にもなって、死んでいく。それ全部一つの「いのち」だというのが一つ。もう一つ、生まれて生きている事だけじゃなくて、年老いていくことも、病にかかるとも、死んでいくことも、みんな大切な、みんな大事な意味のあることなんだよと。どうして。それ全部「いのち」だから。だから我々は、「いのち」を、構造とか、機能とか、働きで説明することも大事なのと同時に、生きていることの意味を問いつめ、向かい合う、その両方が大事なんだと。誰にとって？ 私にとっても、皆さん方にとっても。

生きているということは、いつもうちの学生にも言うんですけども、抽象的に「いのち」というんじゃないくて、必ず「今、ここに、このように」生きているんです。当たり前なことなんですけどね。例えば「今」というのは間違いなく平成の今、今日です。ここについていうのは「京都に」。「このように」とは、皆さん方だったら「女性として」皆さん方も私もありがたいことに五体満足で。みなさん当たり前だと思ってるかもしれませんが、例えば、読んだことあると思いますが、乙武さんの『五体不満足』ですね。乙武さんは五体不満足になろうと思って生まれてきたんで

すか。そんなことないんです、誰もね。あるいは、どなたも、明治時代が良いとか、江戸時代が面白そうだ、江戸時代に生まれよう、いや、平成の方がいいや、つて自分で選んで生まれてきた人誰もいないんです。中国よりも、お隣の飯の食えない北朝鮮よりも、あんまり言うと言語弊があります、日本がいいやと行って選んで生まれて来た人は誰もいないんです。ましてこのように、男性として、女性として、五体満足で、五体不満足で：、どれも選べないこの私、それが「いのち」なんです。だから、どれも選べないけど、それを与えられた私のこととして、全部受け止めていけるかどうか、そのことを皆さん方は問われてるわけです。

一つだけ例を出します。今ここにこのように生きている、そのまま受け止めること、そこから始めるしかないんです。どのように受け止めるかということが問われるんだけど、それがだんだん難しい時代になってきている。特に私のように、お医者さんでもないのに医学部の中にいて「いのち」のあり方を考えていると、難しい時代になったと思うんです。その話も含めてします。例えば、これは三才の子どもです。三才の子どもがお母さんに「ぼくどうして生まれてきたの」って尋ねたっていうんで

生命(いのち)の選択、生き方の選択

す。その子供がその答えを自分で言うんです。それをお母さんが書き留めたのです。
田中大輔くん、三才だそうです。

ママ 田中大輔

あのねママ

ボクどうして生まれてきたのかしってる？

ボクね、ママにあいたくて

うまれてきたんだよ

ちよっと補足説明しておきます。「ぼくどうして生まれてきたの」っていうのは、皆さん問いかけの方向を間違わないでくださいね。お母さんに聞いた時に小さい子どもが、お父ちゃんとお母ちゃんいつ何したの？ と聞いたんじゃない。分かりますね。それは人間の体の機能と構造の説明なんです。そうじゃなくて、三才の子どもで

も、「ぼく生きてていいんだよね。ぼくお母さんの子どもでもいいんだよね」っていうそのことと、面と向かい合ってる。で、この子が出した答え、何て答えたかと言うと、「ママに会いたくて生まれてきたんだよ」と。今、ここに、このように生きていく、それをこの子なりに自分が生きていく意味を見つけた。皆さん方見つけていますか。帰りまでに考えてみてください。「私、何のために今ここに生きていますか。答えお持ちですか、皆さん。三才の子どもがこうやって答えてくれた。それは、今、ここに、このように生きていくっていうのは、繰り返しですが、どれ一つ選べない。選べないけど、与えられた「いのち」を我が「いのち」として、この子は受け止めたんです。「ぼく生きてていいんだよね。ぼくお母さんの子どもでもいいんだよね」。その受け止めるというところから、今生きてるといって、「いのち」を確認することが始まるんだろうと思うんです。どうでしょう。この詩は新潮文庫に入ってます。『あなたに会いたくて生まれてきた詩』宗左近さんがいくつかの詩を選んで本にしています。関心のある方は読んでみてください。

「いのち」を考える時に、私のように元々仏教の思想を考えてきて、医学という近

生命(いのち)の選択、生き方の選択

代科学の最先端のことを学んでいますと、いろんなことに「あれ、これどうして」という疑問にぶつかるんです。大ざっぱな話をしますと、今のサイエンスといいますか、ヨーロッパから入ってきた市民革命以降の、近代市民社会を支えているのはご存じのようにヒューマニズム、いわゆる「人道主義」といいますか「人間中心主義」。

これはこれでもすごい大事な思想なんです。身分社会があった中で、貴族だけが人間じゃなくて、社会的にどんな身分であれ、お金がある者でもない者でも、男でも女でも、みんな人間として敬われなければいけない、大事にしなければいけないという、すごい考え。この考え方がそこにあって、ご存じのようにフランス革命を起こし、あるいは後のアメリカの独立戦争を起こしている。ところが仏教は、あるいはインドの社会の中ではヒューマニズムということは言いません。じゃあ「いのち」あるものをどうやって考えているのというところ、ご存じだと思いますが、漢訳では「衆生」もしくは「有情」と言います。日本語で「生きとし生けるもの」、生けるものすべて。この考え方の違い分かりますか？ 両方とも「いのち」を大切にということとは共通なんだけど、ヒューマニズムと、生きとし生けるもの「衆生」という言葉で仏教が考

えてきたこと、何が違うんだろう。すぐ分かりますね。ヒューマニズムの考え方は「人間の「いのち」は特別だ」と。何と比べて？ イヌやネコやヘビやカエルや……。だから人間を大事にしましょう。それが近代市民革命を起こし、近代市民社会を作ってきたんです。皆さん方「ふん？」と思うかもしれませんが、私、医学部において「なるほどな」と思うのは、人間の「生命」を扱うのは医学部です。人間以外の「生命」はどこで扱うんですか。人間以外の「生命」を勉強するのはどこですか？ 全部獣医学です。だから鳥インフルエンザが流行ると、鳥だけだったら医学部何も関係ない。ところがそれが変化して人間にいろんな問題を引き起こすとなると、医学部の方も慌てるわけです。だけど、鳥インフルエンザの専門家はどこにいるかというのと獣医学部にいます。つまり、同じ「生命」でも人間の「生命」は特別だよということで、近代の市民社会、現代の世界構造ができ上がっている。それに対して、仏教では「いのち」あるもの全て共通だよ、同じ「いのち」だよと訴えている。どちらが良いか悪いか、好きか嫌いかわ別にして、その違いをまず確認してください。

人間の「いのち」を大事にしている時の、人間ってなんだろう。近世のヒューマニ

生命(いのち)の選択、生き方の選択

ズムを支えてきた考え方の一つです。有名なパスカル『パンセ』三四七節、「人間は考える葦である」。その通りです。その考え方が文化を作り、文明を作り、人間のこの住みやすい社会を作ってきた。ところがこれが一步出過ぎちゃうと、どういう問題が起こるか。考えてみて下さい。人間って何? って言ったら、今言ったように「考える葦である」。弱い葦だけを考えることができるんだよと。そういう思考力とか、自己意識とか、理性とか、それが人格を有する人間だと。これ、端的に言うところ、自己意識と言われる考え方は逆なんです。逆に言うところ、理性や思考力や自己意識がないのは何? と言ったら、生物学的なヒト、つまりサルとかイヌとかと区別してヒトだけども、人格を持たないから人間ではないという考え方は。これは困った考え方は。ヒューマニズムを押し進めていくとどこにたどり着くのかという例です。例えば、人間は考える葦である。ゆえに我々の尊厳は全て思考のうちにある。人間が人間として尊いのは、思考力があるからだ。同じ生きものでもイヌやネコとは違うよと。それはその通りなんです。だけど、それを一步越えてはいけない線を越えると、じゃあ、考えることが難しくなったらどうするの。お釈迦様が生老病死と言った、この老の中に

は老化いわゆる老化現象も含まれます。私もだんだん目が遠くなってきて、耳が少しづつ聞こえなくなってきた、時々、敷居なんかに蹴躓いて「足上げて歩いたはずなんだけど……」って言いながらフラフラしてる。そうやって記憶力などがどんどん失われていく。もう記憶力がなくなってる、考えることができなくなったら、私は人間じゃないんでしょか。皆さんの周りにもおられるでしょ。あるいは、お釈迦様の生老病死の「病」の話です。医学的に言えば脳の器質的障害。要するに後天的に脳細胞が萎縮してくるか、最初から萎縮しているか。先天的に萎縮していればいわゆる知的障害その他です。あるいは後天的な障害。この間まで大丈夫だったのに、脳細胞が萎縮して、考えることも、覚えることも何もできなくなってしまふ。三分前にご飯を食べたのに、「あれ、ご飯食べたかな」という状態を引き起こす。皆さん方、周りに覚えございませぬか。今の日本のように高齢化がどんどん進むと、こういう状態がごくごく当たり前になってくる。じゃあ聞きますけど、人間は考える葦である、我々の尊厳はすべて思考のうちにあるというんであれば、考えることのできなくなった、十年後の私だったり、アルツハイマーの方、あるいは知的障害の方は人間じゃないんですか。

生命(いのち)の選択、生き方の選択

どう考えますか?という問題なんです。このパーソン論という考え方、人間は思考力がある、それが人間なんだという考え方です。

ところが全く別な考え方をする方がおられます。滋賀医科大学では四月に入学した医学科の一回生必修科目「医学概論」と看護学科一回生必修科目「看護学原論」との前半を合同講義で実施しています。それぞれの専門性を重視しながら、医療人としての基本的姿勢を共に学んでほしいからです。医学科と看護学科の専門講義を合同講義形式で行うのは、おそらく全国の医学部でもまれなことではと思います。

この一連の講義にびわこ学園の先生にも出講をお願いしています。びわこ学園ってご存じだと思いますが、先天的な知的障害のある、あるいは重症になるとほとんど寝たままで一생을過ごす。もちろん言い方は悪いですけど、うんちも小便も垂れ流し。自分の意志を伝えることもむづかしい。でもこのびわこ学園を作られた糸賀先生という方ですね、「この子らに世の光を」と言わなかった。この子どもらをもっと皆さん暖かく見てくださって、私ならそう言いたくなるけど、糸賀先生という方は言わなかった。「この子どもたちこそ世の光なんだ」と。「いのち」の輝きそのものなんだ

と。すごいことをおっしゃったんです。つまり、片一方でパーソン論のように、考える力がなければ人間じゃないという考え方もあるけど、糸賀先生はそうじゃなくて、人間である、そのことだけで輝いているんだと。糸賀先生っていう方、広い意味で、私どもの大学の先輩でございます。確か、昭和十三年か十四年ぐらいに京都帝国大学の哲学科を卒業されて、この時の恩師の方が波多野精一先生。宗教学の偉い先生でございます。この波多野先生の宗教哲学の中に次のように書いてあるんです。同じ人格とか人権って言いながら、パーソン論を考える人たちは、人間っていうのは考える力がある、逆に言うと考える力がないのは人間じゃない、もつと言うと、アホは人間じゃないという、むちゃくちゃな考え方です。でも波多野先生、あるいはその波多野先生の教えを受けた糸賀先生はそういうふうには考えない。「自己と他者の共同こそが人格の本質であり、実在するものの真の姿である」。ちよつと難しい言い方ですけど、障害がある人もない人も、その人間の関わり合いの中に人格があるんだと。私とあなた、私は今話させてもらってるけど、誰も聞いてくれなかったらこの講演は成立しないんです。分かりますか？ この光華女子大学の屋上で私が一人で「波多野先生が

生命（いのち）の選択、生き方の選択

「……って言ったら、あれアホちがうかってなりますよね。私の話が成り立つのは皆さん方が一生懸命聞いてくれるから。それはあなたという他者と私という自己が、私とあなたが一緒になってこの話の場を作り上げている。その時に、両方、あなたにも、私も今一緒に二人で作りに上げた、あなたと、あなたと、あなたと……みんなで作り上げている、それが人格だと。考える能力があるとか、知的に優れているとか、IQが高いとか低いとか、そういうことじゃないんだと。だから、糸賀先生は「この子らを世の光に」と言った。繰り返します。ヒューマニズムという考え方は、これはこれで素晴らしい考え方です。これが近代市民社会を作り上げて、現代の世界構造を支えているのも事実です。民主主義を引っ張ってきたのも事実です。だけど、それが一歩どこかで引つかかると、考える輩だ、じゃあ考えられんのは人間ではない。そこへ踏み込んでしまう。これは私もよほど気をつけないと。考える輩である、何となくそうだなってうなずいてしまいます。そのことはいいんですけど、それが一歩踏み破った時に、どこへ落ちていくか。実は、その上に近代の医療は成り立っているというところが問題なのです。これから少しずつ申し上げます。

大ざっぱに言いまして、仏教が考えている「いのち」ってそうじゃないんです。そうじゃないっていうのは、「いのち」は人間だけが特別じゃなくて、「いのち」はどんな現れ方をしても等しく、尊い。つまり、五体満足で生まれてきても、五体不満足であつても「いのち」に変わらない。あるいは、仏教のすごさっていうのは、人間の姿をとって現れてきても、イヌの姿をとって現れてきても、「いのち」だよと。

もう一つは、じゃあ、現れた「いのち」が「わたし」なら「わたし」って何って言ったら、今日生きている「わたし」が明日の「わたし」を作っている。皆さん方言うと、このお念仏の大学の光華で、二年なら二年間、四年なら四年間、どのような学生生活を送り、どのような毎日を過ごしたのかということが、二年後のあなた方、四年後のあなた方を作っていく。誰か他の人が作るんじゃない、自分で作る。二年間遊びほうけたら遊びほうけた私がいる。四年間遊びほうけたら遊びほうけている私。四年間勉強したら四年間勉強しただけの私がいる。全部、自分で引き受けるしかない。先程言いました、今、ここに、このように、それは自分では選べない。だけど、与えられた「いのち」を今日どうやって生きるか、明日どうやって生きるか、それは我々

生命（いのち）の選択、生き方の選択

一人一人が選べるんです。それが二年経った時、四年経った時にどんな私になっているか。たとえば医学科や看護学科のように、四年先に、あるいは六年先に国家試験が待っていると、もろに出ますね。国家試験に合格したか落ちたか。でもそれは本質的なことじゃないんです。どういう「いのち」と向かい合った毎日を二年間送ってきたかということが、それに見合った私を作る。四年間どういう生活を送ったかというのはそれに見合ったあなたを作る。ただこれはもうちよつと難しくてですね、今日だけかというところ、今日の私は昨日の私、昨日の私は一昨日の私。おぎゃあって生まれた時から私の積み重ねが今の私。「いのち」は生まれて死んで、死んで生まれてです。生物学的に言うと、おおよそ三十二億年前から「いのち」はずっと続いている。その「いのち」の積み重ねが皆さん方一人一人ですよ。だから、みんな積み重ねが違うから、一人一人違って当たり前なんですよ。違って当たり前、それを現代の遺伝生物学はゲノムで説明します。ゲノム、生命の設計図ともいえるべきものですが、共通の「いのち」から、たった一つの「いのち」から出て、こんなふうに進化していったって、同じような説明です。その時に、じゃあ「いのち」って誰のもの？ 時々、「これ私の

「いのち」だもん。生きようと死のうと勝手や」と思う人がいるかもしれませんが、仏教はそんなふうには言いません。じゃあ「いのち」って誰のもの？ 誰のものでもありません。でも生きているのは私。だれのものでもない「いのち」が、でも私のところにも今届いている。届けられた先が私であり、届けられた先があなたであり、あなたであり……。それを仏教では「無常」とか「無我」と言い方しますが、そんな難しいことじゃなくて、今「いのち」が私に届いていて、そしてその積み重ねが今日の私、明日の私を作っていくんだと。そういう発想です。でも、生きていくことはものすごい辛いことなんです。さっきのヒューマニズムでいうと、生きていくことは誇りなんですけど、仏教的に言うと、ものすごい辛いことであると同時に、ものすごい有難いことなのです。それをこれから申し上げます。

まず、「いのち」は誰のもの。間違わないでください。自分の持ち物ではないんです。例えば、いつも学生諸君に言うんですが、(腕時計を示しながら)これ、私の腕時計です。お店やさんに行つて買ってきました。その時に、これ私のものというの、私と腕時計が別々だったのを、お金を出して私を買ったから私のものになるんで

生命（いのち）の選択、生き方の選択

す。じゃあ私の「いのち」っていう時に、お尋ねしますが、私と「いのち」が別々にあって、これオレの「いのち」って言って取るのですか。私と「いのち」が別にあつたら、「いのち」を取る前の私って何。ないよね、そんなの。私がいって「いのち」を持つているんじゃないかって、「いのち」の中に私がいるんです。それが仏教の考え方。それが一点。だから、オレの「いのち」とか、お前の「いのち」とか、そう考えない。誰のものでもない。「いのち」というのは、ずっと深いところでみんな繋がっている。私の右手と左手と頭と足がバラバラでありながら、私の「いのち」に繋がっている、それと同じ。私の「いのち」の深いところと、皆さん方一人一人の「いのち」の深いところとどっかで繋がってますよ、ということを仏教は伝えてくれる。たとえば、仏教のテキストの中に、「いのち」っていうのは大きな海と波のようなものだと書いてある。どんなことかと言うと、海は「いのち」そのもので、具体的な個々の「いのち」というのは波です。一人一人の「いのち」は、いつでも「いのち」そのものから生まれてまた帰っていき、生まれて帰っていき…。だからこの波っていうのはいつでも仮の姿だよ。仮の姿だよということは、例えばその現れた姿が、五体満足であ

れ、五体不満足であれ、「いのち」として変わらないんだよ、ということ伝えてくれるわけです。それから、今日の私が明日の私を作っている、ということは、無限の過去から現在に至るまで、私がなしてきた良いことも悪いことも、辛いことも悲しいことも、これは私が背負っていくしかない。その背負ってきた私というのは、他の人の積み重ねと違いますから、他の誰とも代わることができないんです。これを、医学系のあるところで話したら、一番分かってくれたのは、面白いことに遺伝生物学、分子生物学の先生方が、「分かった」と言ってくれました。どうしてかというと、三十二億年前から「いのち」というのはずっと続いてきた。それを今、DNA、ゲノムという形で説明します。順番に親からずっと受けつぎながら、三十二億年分、地球上でどれ一つとして同じゲノムの構造を持った人はいない。必ずみんな違う。だから、どの「いのち」も、このイヌあのイヌ、このゴキブリあのゴキブリ、この人あの人、みんなそれぞれ他のゲノムと違ったゲノムを持っているという意味で、世界中に一つしかない「いのち」だと。それを仏教はゲノムという言い方はしませんけれども、無限の過去から積み上げて来た私というあり方は、他の誰とも違う。だから、あなたも三

生命（いのち）の選択、生き方の選択

十二億年の中でたった一つしかない「いのち」なんです。すごいでしょ。その「いのち」を、親からもらったんです。私も一緒。三十二億年の中で、この地球上の何兆、何京、というすごい「いのち」の中で、あなたのゲノムを持っている人はたった一人しかいない。そのぐらいうすごい「いのち」だって、遺伝生物学は教えてくれる。仏教はゲノムとは言わないけど、積み重ねてきたのは、私が積み重ねてきた、その総体としての私のあり方は、他の誰とも代わることができない。だからたった一つしかないあなたのいのち、あなたのあり方だから、どうぞ精一杯生きてください。そのまま受け止めて精一杯生きてください、そういうふうに伝えてくれる。

そういう有難い「いのち」なんだけど、仏教は、もう一つものすごい厳しい見方もするんです。どういう厳しい見方かっていったら、どの「いのち」も、他の「いのち」に依存しなければ、他の「いのち」に助けられなければ生きていけない。分かり易く言えば、他の生き物を殺さなければ、どの生き物も成り立たない。それを仏教では、「いのちの根源的な悲しみ」と表言します。根源的などいうのは、普通、殺したらいけないよ、人のものを取ったらいけないよ、あ、じゃあ止めようって止められま

す。意思が強ければ。でも、人間もイヌもネコも生きていく時に、他の「いのち」を奪わなければ生きていけないんです。じゃあ、他の「いのち」を奪うのを止めたらいいかというと、それはできない。他の「いのち」を奪うのを止めたら自分の「いのち」を奪うことになる。殺生って言いますね、他の「いのち」を奪う。他の「いのち」を奪うことは辛いことだ、悲しいことだ、分かっているけど、それを止めることができないんです。どの「いのち」も。動物も植物も一緒。プランクトンから始まって人間に至るまで。必ず何か他の「いのち」の上に成り立つんです。だからこそ、他の「いのち」に支えられているからこそ、同時に「いのち」のあり方っていうのは、辛いかれども有難いあり方なんだなあと。自分が生きているということは、たくさんの「いのち」の犠牲の上に今この私の「いのち」があるんだと。そのことを喜んでくたさいと。ちょっと難しいかもしれない。たとえば、私も皆さん方もご飯を頂く時、手を合わせて「いただきます」って言いますね。言うでしょ。何を頂くか。他の「いのち」を頂いて我が「いのち」がある。ただ口癖で「いただきます」って言うんじゃないかと、今、このお米一粒であれ、お魚さん一匹であれ、この「いのち」を頂いて私の

生命(いのち)の選択、生き方の選択

「いのち」があるんだなあ。そうやって他の「いのち」に支えられた「いのち」を、どうぞ大事にしてくださいよというのが仏教の考え方です。

そういう「いのち」が、生まれて死んで、生まれて死んでいくんだけれども、我々はどこかで「いのち」があるのが「生」で、「いのち」がなくなるのが「死」だと、医学部の先生方はそう考える。でもお釈迦様はそうじゃなくて、先程言いました「生老病死」生まれて、老いて、時には病になって、死んでいく。それ全部が「いのち」だよ。ということとは、生まれて生きていることだけが尊いんじゃないかって、病気になることも、老いていくことも、そして死んでいくことも意味があるんだよ。その視点を我々どこかで持った方がいいと思うんですね。皆さん方、お念仏の大学で学んでおられますから分かると思いますが、「いのち」が尊いよという意味は、生きていることだけが尊いんじゃないかって、死んでいくことの重み、あるいは死ななきゃいけないことの辛さが我々に教えてくれる「いのち」の重み。その両方を受け取ってください。そのためにちよつと難しい言い方をします。生きているものは生きているものとして大切にすると同時に、死んでいくものは死んでいくものとして大事にしよう。

死んでいくものを死んでいくものとして大事にするってどういうことか。亡くなっていく方が何を思い、何を願い、何を皆さん方に伝えようとしたのか。何を期待していたのか。それを読み取れるか、生きているものが。そのことを考えて次の詩を紹介します。私がこの詩に出会ったのはもう十数年前ですから、この詩の作者中村良子さんという方は立派なお母さんになっているだろうと思うんですが、小学校六年の時の宿題です。弓刷小学校と書いてますが、聞きましたら熊本県の玉名市というところにある小学校です。

『宿題』

中村良子

今日の宿題は つらかった

今までで いちばんつらい宿題だった

一行書いては なみだがあふれた

一行書いては なみだが流れた

生命(いのち)の選択、生き方の選択

「宿題は、お母さんの詩です。」

先生は そう言ってから

「良子さん」

と私を呼ばれた。

「つらい宿題だと思うけど がんばって書いてきてね。

お母さんの思い出としっかり向き合ってみて。」

「お母さん」

と 一行書いたら

お母さんの笑った顔が浮かんだ

「お母さん」

と もうひとつ書いたら

ピンクのブラウスのお母さんが見えた

「お母さん」

と 言ってみたら

「りようこちゃん」

と お母さんの声がした

「お母さん」

と もういちど言ってみただけ

もう 何も 聞こえなかった

がんばって がんばって 書いたけれど

お母さんの詩は できなかった

一行書いては なみだがあふれた

一行読んでは なみだが流れた

今日の宿題は つらかった

今までで いちばんつらい宿題だった

でも

生命(いのち)の選択、生き方の選択

「お母さん」

と いっぱい書いて お母さんに会えた

「お母さん」

と いっぱい呼んで お母さんと話せた

宿題をしていた間

私にも お母さんがいた

私ぐらいの年になると涙が出てくるんです、この詩を読むと。分かりますよね。母の日に「お母さん」の宿題だったんです。でもこの良子さんのところはもうお母さんがおられない。でも死んだらそれで終わりじゃないんです。少なくとも良子さんにとって、宿題をしている間、確かにお母さんはいたのです。お母さんに会えたのです。死んだら終わりじゃなくて、生まれて死んで、死んで生まれての中で、いつでもどういう繋がりがあるか、誰にも分からないけど、少なくともこの良子さんが詩を書いている時は、お母さんはいたのです。あるいはいるんです。戻りますが、お母さんの

思い、お母さんの願い、お母さんもう先に逝かならんけど、あんたこういうふう
 育ってちょうだいね、その期待、それをしっかりと受け止められるか。皆さん方も同
 じ。皆さん方まだ若いですから、ご両親、あるいはおじいちゃん、おばあちゃん、お
 元氣だと思えますけれども、いずれは辛い別れをせんらん。そうして、また次の世
 代へ「いのち」を渡しながら、皆さん方もどこかで旅立っていく。その時に先に亡く
 なった方々の、様々な思いや、願いや、期待を、しっかりと受け止められるかどう
 か。それが「生と死」、生も死もしっかり受け止めるという意味だろうと思うんで
 す。この中村良子さんは間違いない、お母さんは死んでしまったけど、死んでしまっ
 たお母さんもしっかりと抱きしめている。もちろんこの詩を書いたからといってお母
 さんが甦るわけじゃないんです。でも、こういうふうにお母さんと一緒にいれること
 によって、良子さんは、心暖かい一日一日を送れたと思います。死んだら終わりとい
 うことを仏教は絶対言いません。一緒にいます。そういう心の広さ、幅のある考え
 方、生き方をどうぞ受け止めてください。

ついでに雑談致しますと、たまたま医学部にいるから、いろんなことを勉強するん

生命（いのち）の選択、生き方の選択

です。先程ゲノムの話をしました。今、医学部で「いのち」の話をする時は、必ずと
 いったいいいほど、DNAゲノムの話になります。遺伝生物学の先生に、ゲノムって
 何？って聞いたら、非常に分かりやすいですね。「あんた素人やから。ゲノムは生命
 の設計図や」。なるほどなど。確かに「生命」の設計図なんです。三十二億年分続い
 た「生命」の設計図。誰が書いたか知らんけども、「生命」の設計図なんです。「じゃ
 あこの「生命」の設計図は何のために書かれたんですか」と。たぶんお医者さんなら
 そんな質問しないけど、私はしました。そしたらこの遺伝生物学の先生は、いろいろ
 考えて、こういうふうに理解してくれと。サイエンスがいう「生命」の設計図って何
 っていったら、生と性と死だと。「生命」の設計図に書かれている働きって何？って
 いったら、一つは生きていく力。もう一つは「いのち」を受けついでいく力。三つ目
 は死んでいく力。これには私も納得しました。例えば人間の赤ちゃんでも、ネコやイ
 ヌの赤ちゃんでも、生まれた時目も何も見えなくても、お母さんが抱いた瞬間に、誰
 にも教えてもらわなくても、一生懸命おっぱいを探して一生懸命お乳を吸うんです。
 誰に教えてもらわなくても、こうやって「生命」を育んでいくという設計図が、どの

「生命」にも、イヌでもネコでもみんな書き込まれている。その「生命」は私だけで終わらないで、皆さん方がそうでありますように、ちゃんとある年になりましたら、おっぱいが膨らんできまして、ある年齢になったら子どもを産んで良い体になっていく。誰が望んだんでも何でもなくて、「生命」の始まりに、そういうふうな設計図が、ちゃんと「生命」を受けついでいく力が書かれている。もう一つありますね。死んでいく力。これも全部設計図の中にあるっていうんです。私、これが一番驚いたんです。なるほどなど。そういえば、去年(二〇一〇年)ここ光華女子大学の光華セミナー「生命科学と佛教の接点を求めて」の時に来られた中村桂子先生も言っていました。私は写真見せてもらいました。人間なら人間の赤ちゃんが、あるいは鳥でもいいですが、卵の中、あるいはお腹の中にいる時の手って、例えば人間の手って、こういう格好じゃないんだそうですね。確かにダンゴなんです。それが切れて分かれながら指になって延びていく。それを生物学の連中は何て言うかといったら、この手の間の細胞が死んでいってくると。もう役目終わったから死んでいく。死んでいくから切れていくんです。その切れ方が人間と鳥によって違うんです。だから鳥はちゃんと全

生命(いのち)の選択、生き方の選択

部切れないで、水掻きが残るようなそういう設計図になっている。人間はここまで切れる方が便利だからそうなっている。これ、死んでくれなかったらいつまでも指にならない。あるいはもつと分かりやすい例、死んでいく時に死んでいく力がなくて、ただただ間違つて生きている。細胞の中で時々こういうアホな細胞がいるんです。自分の役目が済んでいるにも関わらず死んでいけない。死にきれない細胞もあるんです。何か分かります？ 癌細胞です。癌細胞つて死ぬ時に死ぬ力のない細胞なんです。はた迷惑でもう死んでくれていうのに、辺り構わずどんどん増大していつて、周りを全部圧迫していつて、「いのち」そのものを奪っていく。お釈迦様が生老病死、みんな「いのち」だよと言いつると、一番最先端にいるゲノムの、分子生物学の連中が言うゲノムつて何？ 「いのち」の設計図だよ。この設計図に何が書いてあるの。生きていくことと、「生命」を受けついしていくことと、死んでいくこと。それはお釈迦様が生老病死みんな「いのち」ですよと言いつたことと一緒になんです。だから死んでいくこのことも大事なことなんです。辛いことだけど、悲しいことだけどそれをしつかり受け止める。それをちゃんと受け止めてくれたのがこの詩を創つた中村良子

さんです。

こちらの看護学科の先生もご存じだと思いますが、あまり表に出ないけれども、今、医療の中でたくさん問題になっているうちの一つが、新生児における治療拒否問題。この話をちょっとだけします。これは普通の医療ネグレクト、つまり子どもを虐待したというんじゃないで、病院の中で起こる治療拒否なんです。新生児における治療拒否。医療サイドから見ると、当然この手術、あるいはこの治療を受けて欲しいんだけど、親や家族がそれを受け入れない。そういう問題です。

あんまり表に出てこないけれども、ずっとどこの病院でも、うちの滋賀医科大学の附属病院でも起こっています。何で受け入れてくれないのか。看護学科の方々はお分りかかと思いますが、救急で救急車で運ばれてきた以外は、例えば体にメスを入れる、手術する、親の同意書があるんです。そうするとこの産まれてきた赤ちゃんに、こういう治療を施したい、こういう手術をしたい、でも親が「うん」と言わないと手術できないんです。難しい話はもうあんまりしません。じゃあ何で受け入れられないかと

生命(いのち)の選択、生き方の選択

いうと、子どもが将来、障害児として生きていくことの不安、その他です。どこかでこの「いのち」を大事にせんならんと思いながら、本当にこの子を生かしておくことがこの子にとって幸せなんだろうかと、悩んで、悩んで、悩んで、なかなか「うん」って言えない。例えばダウン症。ダウン症というのは医学的に言いますと、ご存じかと思いますが、染色体のうちの二十一番目の染色体がトミソリーって言って、普通は一個が二個に、二個が四個になるのに、ある時に間違って、突然変異を起こして一対三になる。そのことが様々な障害を起こすんですが、これは、普通だとだいたい千分の一くらい。本によって違うんですけど、つまり千件に一件くらいは差はあれ出てくる。誰に出るか分からない。どういう理由かもよく分からない。ただはつきりしているのは、お母さんが年をとってくると、だんだん頻度が上がってくる。こういう医学の話は医学部の中でする時はいいんですが、医学部の外部でする時はちょっと気が重いです。どうしてかと言うと、例えば今ダウン症の話をするんですね、間違って捉えられる。じゃあダウン症はいけないのかとか、それは差別ではないのかと言われるんで、そういうことを言っているんじゃないということをまずご理解ください。

今、現にどういふことが行われているかといふことの一つの例です。これは一九七八年のアメリカのある学会誌に掲載されたものです。このグラフは私の調べた範囲では一番新しい研究です。ここに書いてあるのはお母さんの年齢で、これはどのくらいの割合で障害のある子が、特にダウン症の子どもが産まれるかを表しています。自然科学の恐ろしいところというか、はつきりしてます。四〇歳くらいまではOKなんですが、四〇を過ぎると加速的に…。これは生物学の先生に言わせると当然だと。どうしてかと言うと、どの生物も、強い子孫を残したい。だから人間の体も他の動物の体も、丈夫な子どもが産める時に妊娠、出産が可能で、それが終わったら妊娠、出産ができないように体が変わっていく。ところが人間だけが、四〇過ぎても五〇なっても六〇になっても、例えば子どもが欲しい、特に皆さん方、どんどん女性が社会進出して、結婚する年齢が遅くなり、出産する年齢が遅くなる。でも本来と言いますか、医学が進歩してない時は、昔はそういう年齢になったら妊娠もすることなかったし、仮に妊娠できても残念ながら多くは流産してしまいました。今は人工授精であれ、体外受精であれ、ともかく妊娠はさせることができる。医学の力で。流産も止めることが

生命(いのち)の選択、生き方の選択

できる。産むことが難しかったら帝王切開すればいい。で、産むことはできるんだけど、動物的な体のしくみは変わらないわけです。そうするとこれがさまざまな障害を引き起こしてくるんです。そういう問題なんですね。その時に、戻りますが、仏教の考え方は、たとい五体満足でも不満足でも、障害があっても健常であっても、みんななどの「いのち」も仏さまから頂いた「いのち」だから等しく尊いんだ、というその発想がある間は、社会はそういうふうに動いていく。ところが医学が進歩してくると、ということが起こるか。女性の方、不愉快に響くかもしれないませんが我慢してください。本来、例えば四〇とか五〇で他の動物だったら妊娠も出産もしないけれども、人間はすることができんです。でもその分、仮に障害があった時に、それでも授かった「いのち」だからと、一緒に生きていこうとする社会を我々が作ってたら問題ないんだけど、なかなか日本の社会も含めて、五体不満足の乙武さんもやっぱり自分で言ってます、人間として生きていく誇りには変わらないけど、五体不満足だと不便だと。その不便なところを社会が補ってくれるかと、なかなかそうはいかない。そういう問題があるんです。先程言いましたように、ダウン症というのは、民族

とか人種とか関係なく起こります。例えば千分の一なら千分の一、一万分の一なら一万分の一で…。これが問題になってきたのは一九八〇年代、アメリカでベビードウという重度のダウン症の子が産まれて、合併症を起こした時にお医者さんが、「この手術をしますか。そうしたら生命は助かりますから」と言った時に、親が「うん」と言わなかった。それはアメリカだけじゃなくて日本でも起こっている。その記録が『いのち輝く日のために』という、年輩の方はご存じだと思います。今はこういう本になっています。たぶんこの図書館にも入っていると思いますので、読んでみてください。これは何かというと、ダウン症で産まれた子どもが合併症を起こして手術しなければ助からない、でも親は、迷って、迷って、迷って、「はい、手術します」と言うてくれない。どんどん栄養剤を入れますけどとてももたない。死んでいくのを見守るだけ、辛い状況です。それがあるルートでマスコミに流れまして、ある新聞社がずっとドキュメントで追っていったんです。こういうことが起こった、こういうことになったと。それに対して、新聞に生まれたからいろんな意見が日本中から寄せられたんです。この本を読むと、一九七〇年代後半から一九八〇年代で、日本の社会はどうい

生命(いのち)の選択、生き方の選択

うふうに考えたか。そのことが分かります。最初は、やっぱり可哀想だから、とにかく手術するのに親御さん同意してくださいよ、たとい障害があっても同じ「いのち」なんだからという意見がドンと多かった。それが一段落したら、今まで、我慢して、我慢して、我慢してた障害のある人たちやその親たちがものを言い出す。そんなきれいな事ではない。親としてどんなに苦労したか。この日本の社会はそんなきれいな事であって、みんな等しくなんて言ってられるような社会じゃないんだ。こんなに差別があつて、こんなに嫌な目をして……。最後に、二十歳前後の障害のある人が自分で意見を書いてきたんです。「この子どもは死なせた方がいい。自分はここまで生きてきたけれども、一つも良いことなかった。今のうちにそつと死なせてあげるのが、この子にとつても今の日本だったら幸せだ」。一九七〇年代から一九八〇年代の日本です。たぶん同じ様なことがあつたら今の日本も変わらないのかもしれない。この問題は結論だけ言いますと、病院が一生懸命説得して、お父さんお母さんが最後に「じゃあ、手術受けます」って言うてくれたんだだけでも、もうその時は赤ちゃんの体力がなくなつて手術を受ける前に亡くなつたんです。そのドキュメントがこの本になん

す。いや、それは一九八〇年代で今は違うだろうと言うかもしれないが…。

厚生労働省が日本中の産婦人科の病院に調査をお願いをして、特に倫理問題を中心に検討した結果が、一九九九年に高橋先生の編で『遺伝子時代の倫理』という大きな報告書になってます。たぶんここの看護学科にもあるかもしれません。その報告書の中に、前熊本大学産婦人科教授、現在は北海道医療大学長松田一郎先生の報告論文「出生前検査・診断 その背景とわが国の現状」があります。このデータは皆さん方に出さない方がいいのかなと迷ってますが。これは、松田先生のグループが日本中で厚生省の研究班として行った実態調査です。一九九七年一月一日から二月三十一日の一年間、妊娠二十二週未満、二十二週未満というのはまだ下ろせるか下ろせないか、そういう時期です。胎児の先天異常の有無を調べる出生前診断をしました。その結果、この一年間に依頼した一六〇のうち一三六の病院その他からデータが集まりました。出生前診断を受けた数が五七四八件です。そのうちで程度の差はあれ、胎児に異常があると判断された例が二四八例。産婦人科の若いドクターに聞きましたら、だいたい三％～五％くらいだからこんなもんでしよう。じゃあ皆さん方、この二四八

生命（いのち）の選択、生き方の選択

のお母さん方、二四八のカップルの中で診断を受けてもなお且つ妊娠を継続した、つまり、子どもを産もうとした人たちと、それじゃちよつと自信ないわ、迷いながらも止めたという人、どのぐらいの割合としますか？ 二四八例で分からなかったら、一〇〇人いたら何人継続し、何人止めたか？（会場の挙手を見ながら）六割が中断？ 四割が産む？ 先程言いましたように、この調査は一九九〇年代ですからわすか一〇年ちよつと前です。すごい数です。継続したのは二七例。一〇〇人いたら一人。止めたカップル二二一人。一〇〇人いたら八九人。七〇年代、八〇年代のあり方をそのまま九〇年代が引き継いでいるんです。良いか悪いか、好きか嫌いかというんじゃないくて、これが日本の現状なのです。私は「ええっ」と、この数字を見た時、間違いないんじゃないかと疑いました。たまたま松田先生のグループの他の先生と知り合いましたのでちよつとこの数字再確認して下さいとお願いしました。そうしたらやはりこのデータの通りということでした。

何が言いたいかと言いますと、例えばお母さんのお腹の中にいる時に、赤ちゃんの状態はこうですよ、ということとは、「産みますか産みませんか」ということを、…後

ろにおられる年輩の方、私も含めてですね、私らの若い時はそんなこと分らなかった時代です。産まれてきて、障害がある、五体満足だ。先程の例は産んでから治療を受けるか受けないかの選択だったんですが、今は、この例にあるように、産む前から、お母さんのお腹の中にいる時から、ある程度状況が分かります。あなたが今産もうとして「生命」はこんなんですよっていうふうには、医学がどんどん進歩し、同時に我々が子どもが欲しいという時、同じ欲しいいんでも、こういう子どもならいいけど、こういう子どもならいいという。そうすると、今日のテーマです。医学医療が進歩すると、あなたの方ご夫婦の、お母さんのお腹の中にいる子どもはこんなんですよ、「生命」のあり方ごなんですよ。こんなんですよというのは、どうしますか？というのを医療が暗黙のうちに聞くんです。これは「生命」の選択です。我々何ができるのと言ったら、こういう子どもならいらないと中止するか、どんな子どもでも仏さまから授かった「いのち」だから、その子と一緒に生きるか。これは我々の「生き方」の選択です。それをごっちゃにして欲しくない。医療がどんどん進展してきたからそれに無条件に従っていくのではなくて、医療が進歩した時に、医学部にいるか

生命（いのち）の選択、生き方の選択

ら痛切に思うんですが、毎日毎日進展します。すごい勢いで新しい研究が進みます。医療が進めば進むほど、先程のように産まれてきてから分かったのが、お母さんのお腹の中にいる時から分かる。この頃はなかなか妊娠しないと、体外受精しますね。三割くらいの確率です。体外受精受精卵が、一つの受精卵が二つになり四つになり…、ある段階で検査すると、すでにある一定の割合で正常か障害があるかが分かるんです。すると次は、その受精卵をお母さんのお腹の中に返しますか、返しませんかと。私のような年齢の人間には「ええっ」という時代なんです。まとめますと、そういうふうに、医学医療というのは、「生命」は今こんな状態ですよ、こんな状態ですよって、前もって、私に言わせると余計なことだと思うんですが、示してくれる。生命の選択をせまってくる。それを受け止めてどうやって生きていくかは皆さん方お一人お一人ですよ。そのところ、誤らないでくださいね。それが私の今日のお願いなんです。

超未熟児の双子として生まれた。生まれたけどどうするか。つまり、治療して「い

のち」をそのまま承らえるかどうか。未熟児網膜症で網膜が剥離して。双子で、超未熟児で、たぶん全盲だろうと。若いお母さん育てられるかどうかとお医者さんは心配してこう言った。「あなたまだ若いんだから次の子どもを産みなさい。がんばって、いい子を産んでください。」そうしたら、このお母さん二十代です。詳しいことは申しません。「違う」と、この若いお母さんは思ったんです。私は次の子どもと幸せになりたいんじゃない。今日の前にいるこの子と幸せになりたい。たとえ超未熟児で、全盲であっても、双子のこの子たちと幸せになりたい。「次はいい子を」という言葉は私は黙って聞いてはいけない。まだ右も左も分からなかった新米の母親はその時そう気づいた。それをちゃんと伝えなければ。でもどうしていいか分からない。喉の奥で言葉が止まって涙が出る。お医者さんは言うんです。「いいですね。次はいい子を産んでください」。いい子を産んでくださいというのは、この子はもう諦めてくださいということ。その時にこの若いお母さんは自分で自分の背中を押した。「あのっ…」。ごくりとつばを飲みこんで、「私は医師の目をまっすぐに見つめた」。そしてできる限りの、すごいですね、できる限りの笑顔でいつきに続けた。「ふたりとも、い

生命(いのち)の選択、生き方の選択

い子です:。」

先端医療は、あなたは若いんだし次の子どもを産みなさい、がんばっていい子を産んでくださいという、「生命」の選択を提示してくれる。提示された時にどういう選択をするのかというのは、この子と幸せになりたいんだという生き方の選択をする。

この若いお母さんは、未熟児であろうと、全盲であろうと、二人ともいい子です。それを自分で選び取った。医療がどんどん進めば、こちらはどんどん進みますけど、これは一つの医学医療が示す選択であって、我々が選ぶのは生き方のほうです。お医者さんがそう言ったからじゃなくて、自分はどんな生き方をしたいのか、どんな生き方を今日選ぶかが、明日の皆さん方一人一人を作っていく。先端医療は「生命」の選択を示してくれるけど、私たちにできることは、どんな生き方を選ぶかのほうなのです。その生き方を選ぶ時に支えてくれるのは、お釈迦様の生老病死が伝えてくれる「いのち」のあり方です。障害があってもなくても、どんな「いのち」でも等しくて、そしてみんな繋がっていて、そして誰かを支え、そして誰かに支えられているんだよという話しです。このテーマはこれで終わります。

次はこれは葛飾柴又の帝釋天。寅さんにでてくる、あそこのお寺の守り神、インドではインドラと呼ばれる神様の話です。この話は『華嚴經』というお経に出てきます。この帝釋天がお釈迦様の縁起の話、支え合いの話を聞いて、それをみんなに分かるように示現したって書いてある。示現したというのは、このスライドのような感じで空中に映像、イメージを浮かび上がらせたという有名な話です。年輩の方はご存じだと思います。何かというと、帝釋天の網と言いまして、空中に網を張ったんです。網の結び目一つ一つから糸を垂らして、その糸の先に大小様々な種類の宝石を吊した。これ何の比喩か分かります？ 皆さん方女性の方ですから分かります。いろんな宝石ありますよね。宝石って光り輝くでしょ。真つ暗闇の中で輝く？ ダイヤモンドでもサファイアでも何でもいいです。光らないですよ。どんなすごい宝石でもダイヤモンドでもサファイアでも、私はそのくらいしか知らない、後はルビーとかなんとかかな。自分で輝けないんです。他から輝かせてもらって、そして輝くんです。この比喩は何かと言ったら、わざわざ網にしてあるのは、空中ですから風が吹いたら揺れるんです。それに紐がついて先に宝石がありますから、この宝石も四方八方

生命(いのち)の選択、生き方の選択

ジャンプしながら揺れるんです。自分では光れない、輝けない宝石が、他から光をもらって、自分で輝いて。輝くということは同時に他の宝石を輝かすんです。そうするとお互いに様々に輝き合ってますから、どの宝石がどの宝石を輝かせたかは分からないけれども、どの宝石も、どの宝石からもらったか分からない光をもらって、自分も輝き、自分が輝くと同時に周りの宝石も輝かすんです。もう一つありますね。他から光をもらいながら、じゃあ、ルビーは周りの宝石からたくさん光をもらったから、他の宝石の色で輝くかと言ったらルビーはルビーの色、輝きを失わないんです。サファイアはサファイアの輝きを失わないんです。これ、何の例えか分かりますか? 「いのち」の輝きの例えなんです。光華の皆さんの一人一人が、皆さん輝いてるんです。唯一、世界で三十二億年まとめて受け継いだあなたの「いのち」しかない、そのあなたが今輝いているということが、自分で気づかなくても、この今日ここにみんなを輝かせている。同時に誰かから輝かせてもらっている。これが一対一の鏡だったら、こっちがこっちを輝かせ、これはあなたのお陰よと言えるけど、特定の誰かのお陰ではなくみんなのお陰。だから、皆さん方一人一人が光華の学生でいるということは、

皆さん一人一人がこの光華の仲間を輝かせている。同時に輝かせてもらっている。大事なことは、宝石は自分では輝けない。輝かせているのは誰ですか？ 一番最初の光をくれたのは。これは仏さまです。分かりますか？ 皆さんはそのことをこの大学で学んでいるんです。皆さん、宝石なんです。宝石ですよ、輝いているんです。あなたが輝いているのです。みんな輝かせ合っている。あなたがここにいてる人をどこかで支え、どこかで輝かせ、同時にみなさんから光を受けて輝いている。それが仏教で言う「縁起」。「いのち」はみんな支えあっているよって言うことの例えです。そのことをお伝えしたくて今日ここに来ました。皆さん方、宝石ですよ。どうぞ忘れずに輝いてください。でも自分で輝いているんじゃないのですよ。そのことも頭の中に入れておいてください。ちょっと時間をオーバーしました。これで終わります。ありがとうございます。

——二〇一一年五月二七日——